Salon

情報技術と教育
― 卒論で考えたこと ―

石　井　健一郎

企業の研究所から名古屋大学に赴任し，２年が経ちました。その間，多くの方から企業の研究所と大学の違いを尋ねられました。こと細かに挙げればきりがありませんが，日々の活動の中で最も大きな違いと感ずるのは何といっても「教育」です。企業の研究所は「教育」をミッションとはしておりませんので，これは当然のことと言えましょう。もちろん，企業の研究所にも若手研究者の指導という教育的側面はありますが，系統的なカリキュラムに沿った教育は，まさに大学ならではのものです。

これまで学部４年生の卒業論文指導も２回経験しました。ワープロできれいに印刷された卒業論文を提出する学生に，40年近く前の自分の姿が重なります。当時はもちろんワープロなどという便利な道具はありません。レポートや論文はすべて手書きです。徹夜をして何とか締め切りに間に合わせ，ほっとした私に指導教授であるＤ先生の厳しい一言が待っていました。

「君の字は読みにくいねえ。達筆で読みにくいというのならまだしも，いわゆる悪筆だな。こんな字だと一生損をするよ」

普段から辛辣な発言で知られてはいましたが，敬愛する先生からのこの一言は応えました。おそらく自分はこの悪筆に一生肩身の狭い思いをすることになるのだなと深刻に受け止めたものです。ところが，その後の情報技術の発展はめざましく，このようなハンディは，ワープロの出現により全く取るに足らない問題となってしまいました。この現実を前に，私に対する40年前のコメントを引き合いに出せば，きっと先生は苦笑されるだろうなどと不謹慎な想像をしておりましたが，残念なことに先生は少し前に亡くなられてしまいました。

情報技術の分野では，ワープロだけでなく，電子辞書，プレゼンテーションソフト，描画ソフト，数式処理ソフト等さまざまな支援ツールが開発され，研究や教育の形態も一昔前とは大きく様変わりしました。学生は，プログラムのバグ取りや手書きによる原稿・図面の作成など，煩わしい作業に時間を取られることはなくなりました。教える側も，板書の代わりにプレゼンテーションソフトを使った講義や音や映像を駆使した講義が可能になりました。これらの道具は一見，学ぶ側にも教える側にも福音をもたらしてくれたように思えます。しかし一方で，昔ながらの研究・教育スタイルの長所を捨てているのではないかという気がしてなりません。例えば，学生にちょっとしたコンピュータシミュレーションの課題を与えても，彼らは自分でプログラムを組も

うとはせず，まずWWW上で公開されているソフトを探し始めます。そうなると教える側も戸惑いを覚えます。教員は，学生が自らの手を汚して課題に取り組むことにより，問題の本質を見極め，より深い理解に到達してくれることを期待しています。しかし，課題をこなす学生の振る舞いを見ていると，類似したプログラムや解法を如何に効率的に探し出せるかという要領の良さを競っているように思えてなりません。また，パソコンのプレゼンテーションソフトを使った講義にしても，果たして学ぶ側にとって適切がどうかはよく考える必要があります。学生が講義のスピードについていけず，結局は昔ながらの板書に戻ったという話もよく耳にします。電子文具をはじめとする情報技術が，従来の煩わしい作業から私達を解放してくれたのは間違いありません。しかし，そもそもそのようにして浮かせた貴重な時間を，より創造的な仕事に充てることができているのでしょうか。これは学生も教員も自問自答すべき問題といえましょう。情報技術が隅々まで行き渡った時代の教育は，従来と同じでよいはずはありません。その長所・短所を十分わきまえて，より相応しい教育の形態を模索する必要があるように思います。

冒頭でも述べましたが，大学を大学たらしめているのはまさに教育です。特に企業勤めの長かった自分にとっては，大学における教育は新鮮であり，やり甲斐を感じます。私の説明に頷きながら熱心にノートを取る学生を発見すると，何にも代え難い達成感を覚えます。しかし，いくらこちらが周到な準備をして臨んでも，講義の出来映えは学生が評価すべきものです。先日10数回に及ぶ講義を終え，自分の授業評価結果を恐る恐る見たところ，「黒板の字をもっときれいに書いてほしい」という意見がありました。D先生の「だから言っただろう」という声が耳元で聞こえたような気がします。

（いしい　けんいちろう：名古屋大学大学院情報科学研究科教授）